

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-14

Symposium 法政大学キャリアデザイン学部 第9回連続公開シンポジウム 「キャリア教育 と高大連携・産学連携」実施報告

UENISHI, Mitsuko / 上西, 充子

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

257

(終了ページ / End Page)

259

(発行年 / Year)

2009-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007560>

Symposium

**法政大学キャリアデザイン学部
第9回 連続公開シンポジウム**

「キャリア教育と高大連携・産学連携」実施報告

法政大学キャリアデザイン学部准教授 上西充子

【日時】 2008年6月6日（金） 14：00～17：30

【場所】 法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー26階スカイホール

【プログラム】

開会挨拶 高野良一（キャリアデザイン学部学部長）

＜第1部＞ 「連携授業」のキャリア教育的意義

コーディネーター：八幡成美（キャリアデザイン学部教授）

・「高大連携における生徒・学生の学びと成長」

酒井 朗（大妻女子大学教授）

・「キャリア体験の意義」

川崎友嗣（関西大学教授）

＜第2部＞ 事例からキャリア教育を考える

コーディネーター：梅崎 修（キャリアデザイン学部准教授）

・高大連携による進学支援

木村誠二（私立千葉黎明高等学校教諭）

上西充子（キャリアデザイン学部准教授）

本学学生（キャリアデザイン学部3年石川悟、加藤寛崇、法学部2年中島文）

・キャリア体験学習としての産学連携

山岡義卓（TAMA協会若手人材コーディネーター）

八幡成美（キャリアデザイン学部教授）

本学学生（キャリアデザイン学部2年大西未希、吉川亜紗美、大藤裕子）

＜コメントと討論＞

本シンポジウムでは、キャリア教育の展開の中での学校の枠を超えた様々な取り組みの模索が紹介され、検討された。

第1部の酒井教授からは、様々な形の高大連携が紹介された後、従来の高大連携において「組織の追及するねらい」（大学側の学生確保、高校側の進学実績の向上、等）が前面に出る傾向があり、取り組みにおける生徒・学生の学びと成長が吟味されにくいことが指摘された。そして、大学進学を強く望んでいるような生徒ではない「様々な生徒」を対象とした高大連携の実践例が紹介され、大学生と高校生が出会うことが高校生には「あきらめ」から「ゆらぎ」への変化をもたらし、大学生にとっては「他者」の理解と「他者」への関わり方を学ぶ機会となっていることが指摘された。

同じく第1部の川崎教授からは、インターシップをはじめとするキャリア体験には「学生と社会をつなぐ」「現在と将来をつなぐ」という2つの意義があることが紹介され、キャリアデザイン科目、インターシップ、個別のキャリアカウンセリングなどが体系的に組み込まれた関西大学キャリア教育プログラムの事例が紹介された。また、キャリア体験を生かすためには学生の主体的・自立的な姿勢と共に事前教育・事後教育の充実が必要であることが指摘された。

第2部では法政大学キャリアデザイン学部の高大連携と産学連携の取り組みが、それぞれ大学側、高校・産業界側、参加学生側の三者から紹介された。

高大連携の事例としては、法政大学キャリアデザイン学部上西ゼミの学生と千葉黎明高校特別進学クラスの生徒との継続的な交流の取り組みが紹介された。生徒に都心の大学に目を向けさせたい、将来への期待感を高めたい、という高校側の意図が、大学生と高校生のリラックスした対話の中から自然に実現されていく様子が

示された。本学准教授上西からは、この交流の機会が、大学生にとっては、企画する役割を担う、相手の立場に立つ発想ができる、などの意義があることが示された。また、継続的な活動が可能であった条件として、高校側の目的が明確であること、高校側の要請が過大でないこと、高校側の姿勢が「丸投げ」でないこと、などが示された。千葉黎明高校木村教諭からは、高大連携を成功させるポイントとして、連続性のある関係を築く、結果をすぐに求めない、事前事後学習を必ず行う、指導のビジョンや目標を明確に持つ、高校生と大学生の学びの場となるようにする（入試の駆け引きや宣伝に利用しない）ことが示された。また、支援側として関わったキャリアデザイン学部3年石川悟、加藤寛崇と、元・千葉黎明高校在校生であり、交流の受け手として参加していた法学部2年中島文より、それぞれの視点からの交流の意義が語られた。

産学連携の事例としては、社団法人首都圏産学活性化協会（TAMA協会）と法政大学キャリアデザイン学部との間で実施されたキャリア体験学習の取り組みが紹介された。TAMA協会の山岡コーディネーターからは、TAMA協会が地域における企業と大学・学生のネットワーク作りを行うことによって、研究開発や企画提案など、企業と学生の様々なコラボレーション事業が実施されており、企業と学生双方にとって意義があることが紹介された。本学教授八幡からは、産学連携型のキャリア体験学習によって、学生がビジネスの世界でリアルな体験ができること、その中でチームワークや考える力、コミュニケーション力などがおのずと問われていくが示された。また、具体的な商品開発に関わった事例が紹介され、産学連携を継続していくために必要なものとして、企業の小回りの良さ、大学側における活動の正課授業としての位置づけ、コーディネート機関の重要性などが指摘され、また、今後の課題として、コスト負担の問題や、プログラム評価の問題が指摘された。さらに、実際に製品開発に携わったキャリアデザ

デザイン学部2年大西未希、吉川亜紗美、大藤裕子の3名が、それぞれの体験の意義を語った。

最後に「コメントと討論」として、酒井教授、

川崎教授より第2部の事例報告へのコメントをいただき、高大連携・産学連携が学生、高校側、企業側それぞれにとって意義のある活動となりうる条件などが考察された。